

4. 胃切除術後患者の上部消化管内視鏡検査における食物残渣滞留に関する調査

佐賀大学医学部附属病院

看護師 ○白武 弥紗、福田 智子、岡田 直子、金子ゆかり

医師 坂田 資尚

【はじめに】

上部消化管内視鏡検査を行う患者は前日21時から絶食としているが、検査の際に胃内に食物残渣が滞留している患者がたびたび見受けられる。特に胃切除術後の患者ではその割合は増加する傾向にある。胃内の食物残渣滞留によって検査時の嘔吐や誤嚥のリスクが高まり、また、胃内を十分に観察できないという患者にとってのデメリットが生じる。そこで、検査前の食事制限指導内容に役立てるために、胃切除術後の患者に焦点を絞って、食物残渣が滞留しやすい患者の傾向を調査しようと考えた。

【研究目的】

胃切除術後の患者において、食物が胃内に滞留しやすい患者はどのような患者であるかを調査する。

【方法】

2017年1月から12月に上部消化管内視鏡検査を受けた胃切除術後の患者を対象とし、診療記録から年齢、性別、検査時刻、再建方法、術後経年、糖尿病の有無について情報収集し、検査時の食物残渣の有無との関連に有意差があるかどうかを調査する。なお、診療記録の情報を研究に用いることに同意のない患者、消化管狭窄等の器質的要因を有している患者、前日21時以前からの長時間の絶食期間をおいている入院患者、前日21時以降に摂食している急患患者は研究対象から除くものとする。

【結果】

対象者は211名であり、男性は150名、女性は61名であった。対象者のうち食物残渣滞留患者は46名であった。性別、検査時刻、再建方法、糖尿病の有無の項目では食物残渣の有無との有意差は認めなかった。年齢では、オッズ比による検定で80歳以上の患者で残渣が滞留しやすい傾向を認めた。術後経年では術後2年以内の患者と2年を超える患者で比較した場合に、2年以内の患者に食物残渣が滞留しやすい傾向を認めた。

【考察】

加齢に伴い消化管蠕動の機能が低下し、そのために80歳以上の患者で食物が胃内に滞留

しやすい傾向を認めたと考えられる。術後経年に関して、前年度の検査時に食物残渣について指摘された患者では自主的に夕食を早めに摂ることで絶食時間を数時間長くとっていたり、自主的に夕食を易消化食にするなどの対応をしている患者が見受けられ、また、医師が検査前数日間のみの内服として胃排泄促進の内服薬を処方するなどの対応をしていることもあるため、その点が関与している可能性がある。

【結語】

80歳以上の高齢患者および術後経年2年以内の患者では食物が胃内に滞留しやすい傾向を認めた。それらの要因を有する患者に前日の夕食を早めにとってもらったり易消化食にするなどの指導を行うことで、より確実な検査が実施できる可能性が示唆されたが、術後経年に関しては今回調査した項目外の要素が関与している可能性もあるため、患者に対する検査前の過剰な食事制限を防ぐためには、さらなる調査を要すると考えた。

【連絡先：849-8501 佐賀市鍋島5丁目1番1号 TEL：0952-31-6511（代表）】